

訓読

169 兢きようきようとして鳳ほう扈いに馴なれ

170 懐りんりん懐いとして龍りゆう泉せんを撫なづ

171 屣くつを脱はぐ黄わう埃いの俗

172 襟えりを交まふ紫し府ふの仙

173 桜おう花か通つう夜やの宴えん

174 菊きく酒しゆ後ご朝ちやうの筵えん

禁中密宴、余毎に之に預かる

175 器つたな拙なくして豊ひよ澤たくを承うけ

176 舟ふね頑なにして巨こ川がわを濟わたる

口語訳

169 おそれ戒めて慎みながら、帝の後ろの屏風に馴れるようにした（慎み慎みて帝に従ったものである）。

170 危ぶみおそれながら宝剣を撫でていたのである（おそろおそろ帝に寄り添い補佐してきた）。

171 （また）黄色の土ほこりにまみれた俗習を惜しげもなく捨ててしまつて

172 宮中の殿上人たちと交際するようになった。

173 桜花を愛づる夜通しの宴にも出たし、

174 重陽の菊の節句の翌朝にある、菊酒の宴にも出た。

禁中の親しいもの同志の私的な宴には、自分は毎回出席していた